

# 「経口摂取による ADL 向上をめざして」

## ～ スプーンでの食事摂取を試みて～

施設名：あけみおの里

発表者：荒武 由佳

### 【はじめに】

当施設は、入所100床（2階46床：3階54床）短期入所、通所リハがあります。2階入所者様は、経管栄養の方や食事介助の必要な方が多くいます。その中にはスプーンの使用が難しく仕方なくチップを使用している方がいます。

食事は生きていく為に大切なことであり、少しでも美味しく楽しくまた安全で誤嚥の少ない食事が出来ないかと考えました。そこで私たちはチップを使用している方を対象にスプーンでの食事摂取を試みたので報告します。

### 【事例紹介】

女性 91歳 要介護5 C2 a 右不全麻痺

平成18年8月より入所される。ミキサー食をスプーン使用し、介助でほぼ全量摂取されてきました。平成19年10月頃より開口不良がみられチップとスプーンを併用するようになりました。平成20年4月頃からはスプーンでの介助がさらに難しくチップのみの使用となりました。なかなか嚥下をせず口に含んだままの時もあります。しかし、甘いおやつ等はスプーンでの摂取が出来る時もあります。

### 【経過】

食事前に口腔ケアで口腔内を刺激し口腔と頸部のストレッチを実施しました。食事介助は、甘みのあるものよりスプーンで介助しました。

食事介助の様子を毎日観察ノートに記録しました。

併設病院の言語聴覚士より頸部ストレッチ、食事の時の正しい姿勢を教わり、その方法をパネルにし本人の車椅子に取り付けました。

経過中、発熱で体調を崩し点滴による治療の為約1週間ほど離床できずベッド上での食事介助となったが、体調の回復を見ながらゆっくりと離床しスプーンでの摂取を再開しました。

### 【結果】

時間はかかるが食事の1～5割り程度はスプーンで摂取出来るようになり残りはチップを併用して

います。また、以前に比べ口に含んでいる時間が短くなりました。

食事介助に要する時間は、30分ないし50分と少し伸びました。本人の表情を見ながら声かけを多くすることより、無表情でほとんど発語のない入所者様から「いらない」「もう食べない」「おいしい」との声が聞かれるようになりました。

### 【まとめ】

開口しないからと安易にチップだけに頼り無造作に食事介助をしていることに疑問を感じ、入所者様にとってどのような方法が良いのか、もっと良い方法はないかと考えた時、基本的な食事の姿勢や顔面、口腔、頸部のストレッチの重要性を学び実施したことから少しずつではあるが改善への変化がみられました。私たちが普段何気なく行う食べる行為も、食事摂取に何らかの障害を持つ入所者様にとって苦痛を伴う食事となります。人として一番の楽しみの食事を美味しく食べてもらいたいと考えます。介護することに携わる者として可能な限り経口から摂取出来るようにその個々にあった介助の方法を考えていき、美味しく楽しく食事出来るように取り組んでいきたいです。